「定住狩猟採集民」の世界－西アジアの新石器時代から見えてくるもの－

三宅　裕（筑波大学）

【要旨】　農耕牧畜による食糧生産経済の開始は、「新石器革命」と呼ばれたように、社会を変革する大きな原動力となったと考えられてきた。しかし、トルコの遺跡ギョベックリ・テペでの発見や近年明らかになってきた先土器新石器時代の集落の様相は、農耕牧畜に基盤を置く社会が成立する以前に、すでに複雑な社会が形成されていた可能性を示しており、農耕牧畜という生業に対する評価を再考する必要が出てきた。

１．西アジアの新石器時代と「新石器革命」論

新石器時代とは

新石器時代という時代名称は、「三時代法」において設定された「石器時代」を新旧２つの時代に区分する必要が生じた際に、石器時代の新しい段階という意味で用いられるようになった（19 世紀中頃から）。当初は、磨製石器が製作・使用されるようになった時代と定義されていたが、その後 V. G.チャイルドが、狩猟採集から農耕牧畜への移行こそ社会にとってより重要な変化であったとして、農耕牧畜の開始を新石器時代の要件とすべきであると主張した。そして、農耕牧畜による生産経済の開始は人類史における革命的な出来事であったと高く評価し、それを「新石器革命」と呼んだ。

これまでの新石器時代研究では、農耕牧畜がいつ、どこで、どのように開始されたのか解明することが最大のテーマとされてきたが、その背景にはチャイルドに代表されるように、農耕牧畜による食糧生産の開始が歴史の大きな転換点であったとする共通の認識があった。このような考えは、もはや常識として私たちの中に刷り込まれているとも言え、それは西アジア以外の地域においても例外ではない。日本考古学でも、農耕以前と以降ということで、縄文時代と弥生時代の間に大きな断絶を見ようとする立場や、弥生時代早期の設定をめぐる議論の中にそうした認識の一端を窺うことができる。

西アジアの新石器時代

西アジアの新石器時代は、更新世から完新世へと移り変わる頃、紀元前 9600 年頃に始まったとされている（図 2）。日本列島を含む東アジアと比べると、西アジアでは土器の出現が大きく遅れ（前 7000 年頃）、新石器時代は土器の無い「先土器新石器時代」と土器をともなう「土器新石器時代」に区分される。先土器新石器時代はさらに、住居の形状が円形で打製石器が一般に小型である A（PPNA）期と、遺構が矩形となり石器が大型化する B（PPNB）期に細分される。

新石器時代は農耕牧畜が開始された時代とされてきたが、データの蓄積が進むにつれ、実際には先土器新石器時代の前半には、まだその証拠がみられないことが明らかになってきた。栽培型のムギ類が出現するのは PPNB 中期頃、家畜の飼育が本格化するのは PPNB 後期頃というのが、大方の見方である。大枠での時代の定義と実際の内容がうまく一致していないということになるが、農耕牧畜の起源を追究するのは簡単なことではなく、また想像以上に長い時間をかけて達成された過程であるとの認識が現在では支配的になっている。縄文時代においても、クリの管理、ダイズやアズキの栽培、イノシシの飼育の可能性が指摘されているように、人間と動植物の関係は「狩猟採集／農耕牧畜」という二分法で語れるほど単純なものではなく、「低レベル食糧生産段階」や「プレ・ドメスティケーション」といった概念を導入し、両者の間を繋ぐような活動にも目を配っていく必要がある。

２．ギョベックリ・テペ遺跡

新石器時代観を覆す発見

伝統的な新石器時代観によれば、新石器時代は農耕牧畜の開始により新たな一歩を踏み出したものの、生産力自体はまださほど高くなく、「初期農耕村落」という用語に象徴されるように、小規模な集落が散在する、比較的単純で平等主義的な社会というイメージで捉えられてきた。しかし、1990

年代半ばから発掘調査の始まったギョベックリ・テペ遺跡での発見は、従来の新石器時代観に大きく見直しを迫るものとなった。この山上に位置する遺跡では、モニュメントと呼ぶにふさわしい大型の円形遺構が見つかったものの、明確に住居と認定できる遺構は確認されなかった（図 3-4)。通常の集落遺跡とは明らかに様相が異なっており、広範な地域から人々が集う祭祀センターであったのではなかという評価も生まれた。大規模なモニュメントの造営には多くの労働力を組織的に動員する必要があっただろうし、集落の単位を超えた儀礼祭祀を主宰できる複雑な社会組織の存在を想定しなければならなくなった。さらに重要な点は、ギョベックリ・テペ遺跡では農耕牧畜を営んでいたような証拠が認められず、農耕牧畜を基盤としていない人々によって生み出されたことである（ここでは、定住狩猟採集民としておく)。農耕牧畜の開始以前に、モニュメントを造営し、大規模な儀礼祭祀を執り行うような複雑な社会組織が形成されていたことになり、農耕牧畜の開始を社会的変革の出発点と見なす「新石器革命」論に対しても疑問を突きつけることになった。

遺跡の概要

ギョベックリ・テペ遺跡はトルコ南東部のシャンル・ウルファ県に位置し、シリアへと連なるハラン平原が一望できる、標高約 800m の山地上にある。遺跡からの眺望は抜群だが、水源からは遠く、日々の生活に適した場所であるとは言えない。ドイツ隊の調査によって、4 つの層が確認されたが、新石器時代の様相が比較的明らかになっているのは第Ⅲ層と第Ⅱ層である。放射性炭素年代により、下層の第Ⅲ層は PPNA 期に、上層の第Ⅱ層は PPNB 前期に比定されている。これは、PPNA 期の第Ⅲ層では遺構のプランが円形であること、PPNB 期の第Ⅱ層になるとプランが矩形に変化することともうまく対応している（図 5)。興味深いのは、古い第Ⅲ層の遺構の方がはるかに規模が大きいことである。

第Ⅲ層の大型遺構群

第Ⅲ層からは、最大のものでは直径が 20mにも達する、規模の大きい円形遺構が検出された。これまでのところ 4 基が調査されたが、新たに調査が始まった遺跡西部の発掘区でも類似した遺構が発見され、遺跡全体にこうした大型遺構が分布していると考えられる。磁気探査でもそれを裏付けるような成果が得られており、少なくとも 20 基の大型円形遺構が存在するとみられている。

建物の中央には大型の T 字形石柱が 2 基並ぶように立てられ、周囲をめぐる壁の内側にはベンチ状の施設が設けられ､そこに埋め込まれるような形でやや小型の T 字形石柱が配されている(図 6)。建物中央の T 字形石柱は高さが 5.5mほどあり、その重さは 15 t にも達すると推定されている。床面は石灰岩の岩盤を掘りくぼめて作られ、T 字形石柱のための台座は意図的に岩盤を掘り残して作出されている。周囲のベンチに配されている石柱は、やや小ぶりではあるものの、それでも高さは 3 m近くある。遺跡の北方にはＴ字形石柱の石切り場も確認されており、そこには長さ 7mほどの石柱が切り出されることなく残されたままになっているものもある。

遺構の構造についてはまだ解明されていない部分もあるが、円形遺構の壁が幾重かに巡っているように見えるのは、半地下式の構造の遺構が何度か改築された結果によるものと考えられる。はじめに最も大きな規模の遺構が構築され、必要に応じて規模を縮小させながら何度か改築がおこなわれたと想定される。また、これらの遺構は最終的にその役割を終えた時に、意図的に埋められたとも考えられている。一気に埋められたことを示す遺構の覆土の状況（実際にはほとんどが礫）や、重く不安定な T 字形石柱が立ったままの状態で出土していることなどがその根拠となっている。遺構を意図的に埋め戻すことも、儀礼の中の重要な行為であったと思われる。

T 字形石柱

Ｔ字形石柱には、浅い浮き彫りによって人間の腕から手にかけての部分が表現されているものがあり（図 10)、石柱自体が表象しているものは、人間の姿をした何らかの存在であることがわかる。突出している頂部は頭部に相当すると考えられ、腰の部分にはベルトが描かれ、前面にはキツネと思われる動物の毛皮の前掛けが表現されている例もある。首の部分にＶ字形の表現が認められる点において、イェニマハーレ遺跡から出土した彫像と共通点があり（図 11)、その彫像が男性像であることが明らかなことから、T 字形石柱も男性を表現したものである可能性が高いと言える。より具体的には、神のような聖なる存在、偉大な祖先これが特定の祖先、あるいは伝説上の祖先を表象したものであるならば、そこで執り行なわれていた儀礼祭祀が、祖先崇拝と深く関係するものであっ

たと想定することも可能になる。

動物のシンボリズム

T 字形石柱には、その側面にキツネ、ヘビ、イノシシ、鳥などの動物が浮彫りによって表現されている例も数多く認められる（図 7)。イノシシは明らかに雄であり、鋭い牙を剥き出しにした獰猛さが強調されている。少ないながらもサソリやクモも認められ、人間にとって危険な存在でありながらも、野生の力強さや、特殊な力をもち憧憬の対象となる動物が中心となっているのが特徴である。

実際に遺跡から出土した動物骨では有蹄類が 80%以上を占め、その内訳はガゼルが最も多く、野生ウシ、野生ロバ、イノシシ、アカシカ、野生ヤギ/ヒツジ、ウサギ、キツネの順となっている。ウシ、ヒツジ、ヤギはいずれも野生のものであることが確認されている。主に狩猟の対象となっていたガゼルや野生ロバは図像としてほとんど登場せず、狩猟儀礼との関連は考えにくい状況にある。ギョベックリ・テペで明らかになったシンボリズムの中に農耕や牧畜との関連を見出すのは困難であり、それは遺跡から出土した動植物資料の分析結果とも矛盾しない。そこには、定住生活への移行によって新たな社会を構築した、狩猟採集民の宇宙観が表現されていると評価しておきたい。

別の祭祀遺跡の存在

ギョベックリ・テペ遺跡が位置するハラン平原を囲む丘陵地帯においては、近年遺跡の踏査が進み、T 字形石柱をともなう遺跡がほかにいくつか存在することが明らかになった（図 1)。カラハン・テペ遺跡はギョベックリ・テペ遺跡と立地がよく似ており、遺物の散布する範囲から 6 ha ほどの規模の遺跡であったと推定されている。地表面からの観察において、遺跡の東側を中心に、T 字形石柱が 266 基も確認されている。まだ発掘調査がおこなわれていないため、その評価については慎重にならざるを得ない部分もあるが、ギョベックリ・テペ遺跡の周辺にはそれとよく似た性格の遺跡が存在し、もしカラハン・テペ遺跡がギョベックリ・テペ遺跡と同時期に機能していたとするならば、互いに競い合いながら、遺跡の造営をおこなっていたことが考えられるようになる。

３．先土器新石器時代の集落

公共建造物の存在

ギョベックリ・テペのような遺跡を生み出した社会を理解するためには、同時期の集落遺跡の様相にも目を向ける必要がある。トルコ南東部では、チャヨニュ遺跡やネヴァル・チョリ遺跡のように、集落の一角に一般の住居跡とは異なる、公共建造物的性格をもった建物が存在することが知られていた。チャヨニュ遺跡はほぼ先土器新石器時代を通じて継続的に居住が営まれた遺跡であるが、遺構内から 400 体以上の人骨が検出された「スカル・ビルディング（頭蓋骨建物)」をはじめとして、各時期に 1 基から 2 基の公共建造物が確認されている（図 12)。ネヴァル・チョリ遺跡はギョベックリ・テペ遺跡に後続する時期の遺跡であるが、T 字形石柱をともなう「祭儀建物（カルト・ビルディング)」が検出され（図 8)、大きな注目を集めた。しかし、これらの遺跡が発掘された当時は、従来の新石器時代観に縛られていたこともあり、その意義がすぐに正当に評価されることはなく、解釈に苦しむ例外的な存在として扱われていた。

しかし、ギョベックリ・テペ遺跡での発見をひとつの契機として、それらを再評価する動き高まり、またシリアのユーフラテス川中流域の集落遺跡でも公共建造物の発見が相次いだことから、集落内に儀礼祭祀と深く関係する公共建造物が存在する姿は、例外的であるどころか、むしろ先土器新石器時代の集落の一般的な姿であると解釈できるようになった。今では、トルコのティグリス川上流域やアナトリアの高原部、さらにはヨルダンでもそうした例が知られるようになり、地域的にも西アジアの広範な地域におよぶ現象であったことが明らかになっている。

長距離交易と工芸技術の発達

長野県とも共通するところがあるが、トルコは西アジアでも有数の黒曜石の産地として知られている。カッパドキア産の名でも知られる中央アナトリアの原産地周辺では、前期旧石器時代から石器の石材として黒曜石が利用され、黒曜石製のハンドアックスも確認されている。ただし、それが広域に流通するようになるのは、新石器時代の直前の時期からである。新石器時代にも黒曜石は交易ネットワークを通じて広く流通し、筑波大学アナトリア調査団が発掘調査を続けているハッサンケイフ・ホユック遺跡でも、遺跡から 200 ㎞以上離れた東アナトリア産の黒曜石の出土が確認され

ている。
　地中海産の貝類も先土器新石器時代には広域に流通していたことが知られている。ハッサンケイフ・ホユック遺跡は地中海からは 500 ㎞近く離れた内陸の遺跡であるが、ビーズに加工された貝製ビーズが墓の副葬品として数多く出土している。また、孔雀石（酸化銅鉱石）・自然銅なども先土器新石器時代の遺跡からは出土し、装身具などに加工されたほかの希少石材とともに、交易の対象となっていた。石製品の中にはクロライト製の石製容器など、刻文により動物像が表現された、象徴的器物と評価できる事例もある（図 13-15）。高度な工芸技術の一端が窺われるとともに、象徴的意味の付与された器物が盛んに生産されていた様子が明らかになっている。

４．まとめ

　ギョベックリ・テペ遺跡や同時期の集落の様相は、農耕牧畜に基盤を置く社会が成立する以前に、すでに複雑な社会が形成されていたことを示唆している。モニュメントと呼べる大型の祭祀遺構、祭祀センター的性格を持つ遺跡、儀礼祭祀に関わる公共建造物、遠距離交易による稀少物資の入手、象徴的器物の生産など、どれも農耕牧畜による生産経済が生み出したものではないことになる。その社会においては儀礼祭祀が大きな役割を果していた様子が窺われ、祖先崇拝をひとつの核とする血縁集団が組織され、労働力の動員に大きな役割を果していた可能性も考えられる。こうした社会の変化をもたらした要因についてはまだ解明されていない部分も多いが、定住集落の出現やそれにともなう社会の規模の拡大が、社会的不平等を増幅させ、エリート層を出現させた可能性がある。いずれにせよ、農耕牧畜が社会を変革する原動力となったというよりは、むしろ社会の変化の結果、より生産性の高い生業が求められるようになったと考えることができる。

【参考文献】（日本語の文献のみ掲載した）
三宅　裕　2014 「西アジアの新石器時代　－農耕・牧畜と社会の関係」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館、94-103 頁。
三宅　裕　2015 「西アジアにおける神殿の出現　新石器時代の公共建造物をめぐって」関　雄二編『古代文明アンデスと西アジア　神殿と権力の生成』朝日選書 935、朝日新聞出版社、41-86 頁。
三宅　裕　2017 「揺らぐ新石器革命論－農耕・牧畜の起源と新石器時代の社会－」『季刊考古学』141 号、33-36 頁。

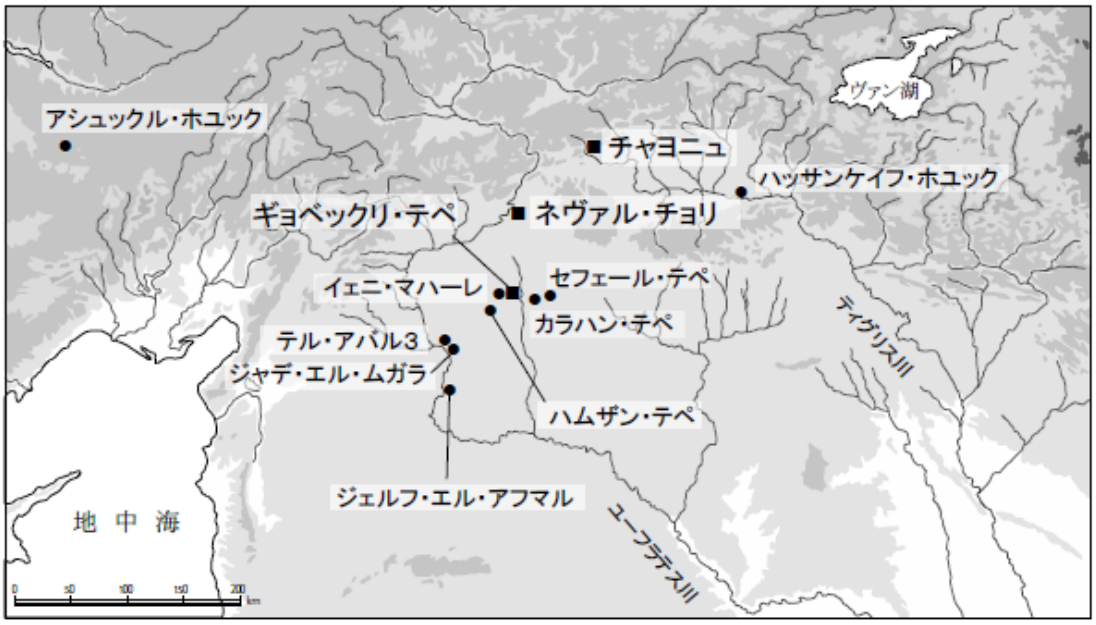

図１　遺跡分布図

時　代	年　代
終末期旧石器時代	前 18,000~ 前 9,600 年
先土器新石器時代 A 期	前 9,600~ 前 8,500 年
先土器新石器時代 B 期	前 8,500~ 前 7,000/6,800 年
土器新石器時代	前 7,000/6,800~ 前 6,100/6,000 年

図２　西アジア新石器時代の時代区分

図３　ギョベックリ・テペ遺跡

図４　ギョベックリ・テペ遺跡遺構 C

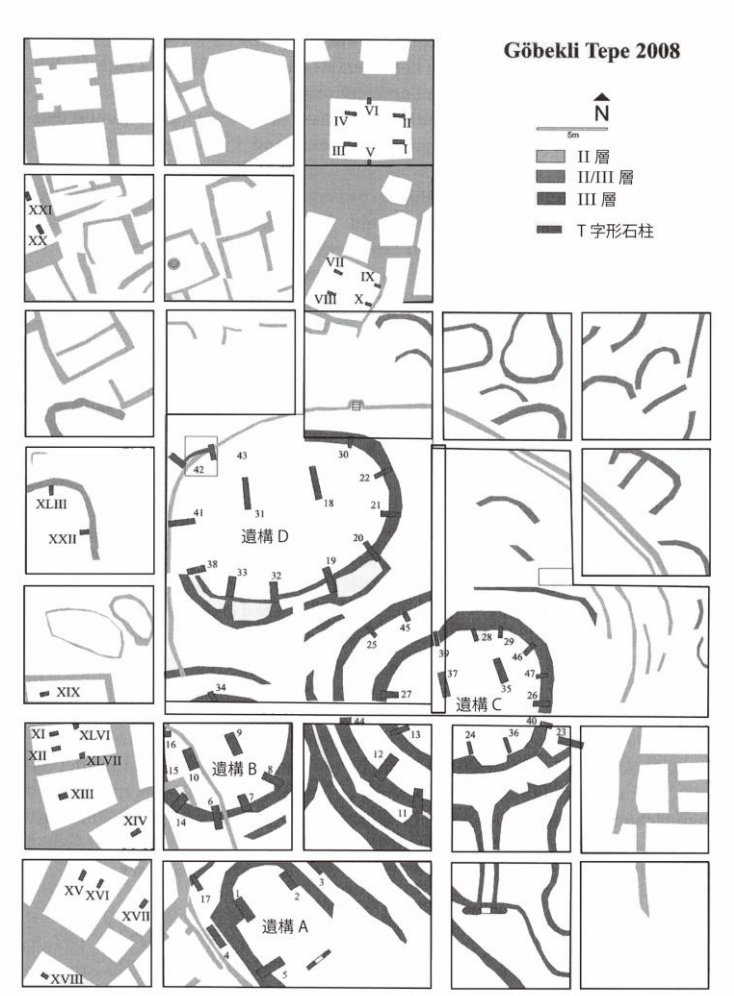

図５　ギョベックリ・テペ遺跡遺構分布図

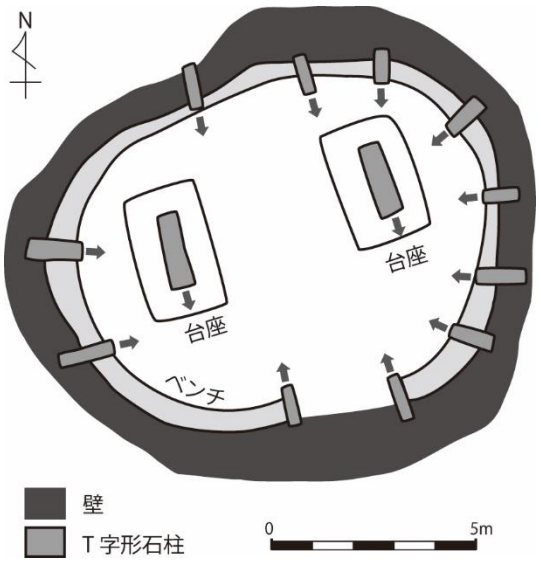

図６　ギョベックリ・テペ遺構 C

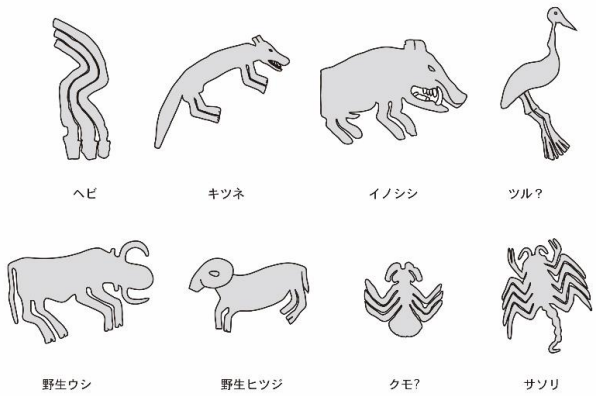

図７　T 字形石柱に表現された動物像

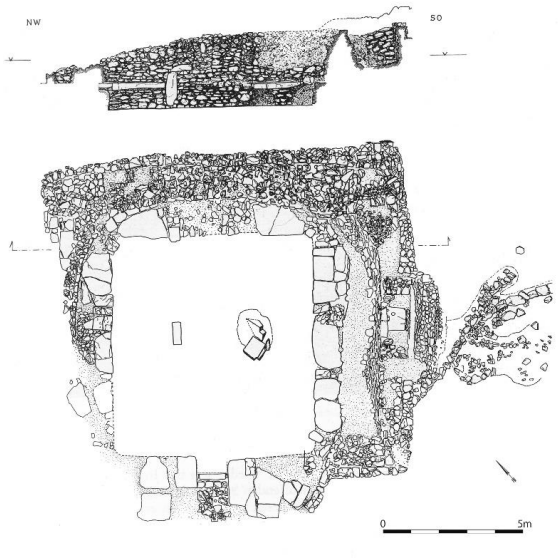

図８　ネヴァル・チョリ遺跡祭儀建物

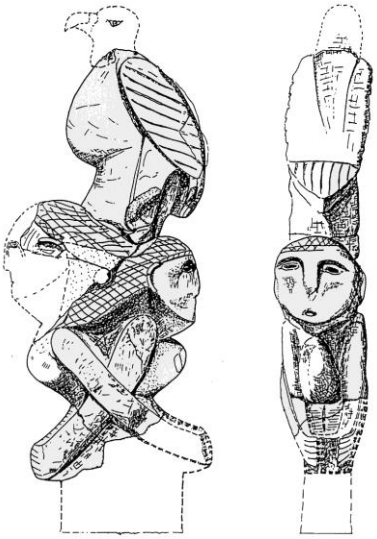

図９　祭儀建物から出土した彫像

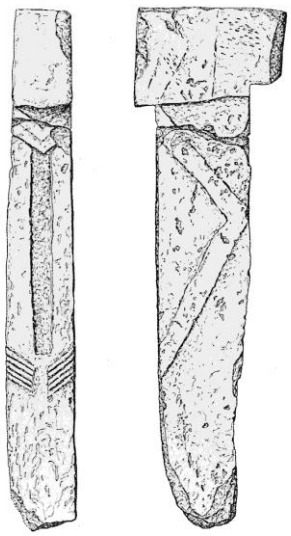

図 10　ネヴァル・チョリ遺跡 T 字形石柱

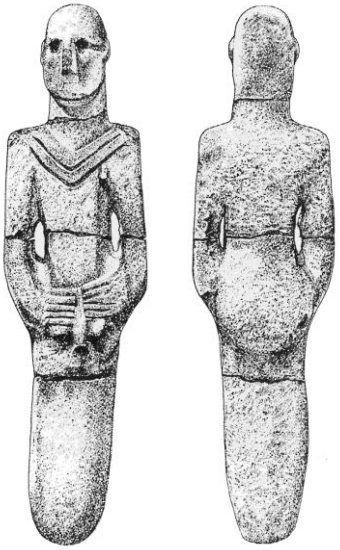

図 11　イェニマハーレ遺跡出土彫像

図 11　ウルファ博物館に移築された祭儀建物

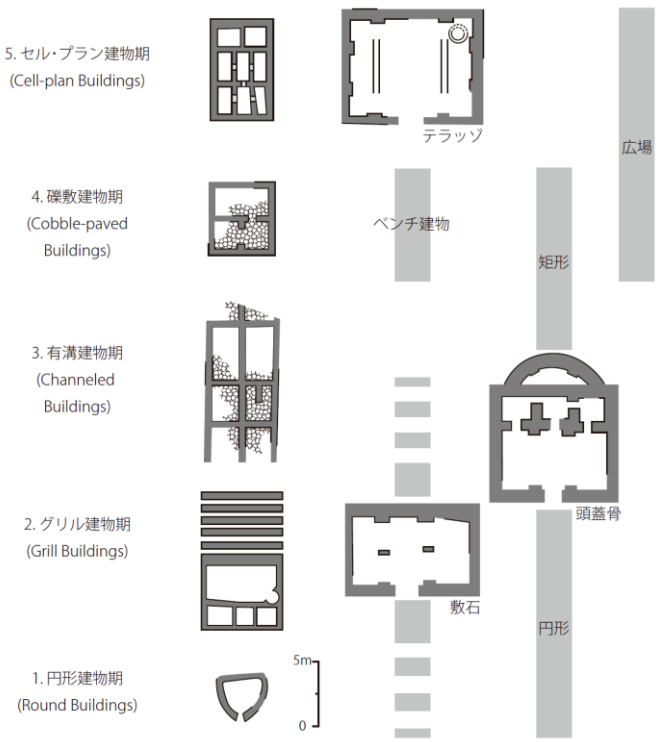

図 12　チャヨニュ遺跡

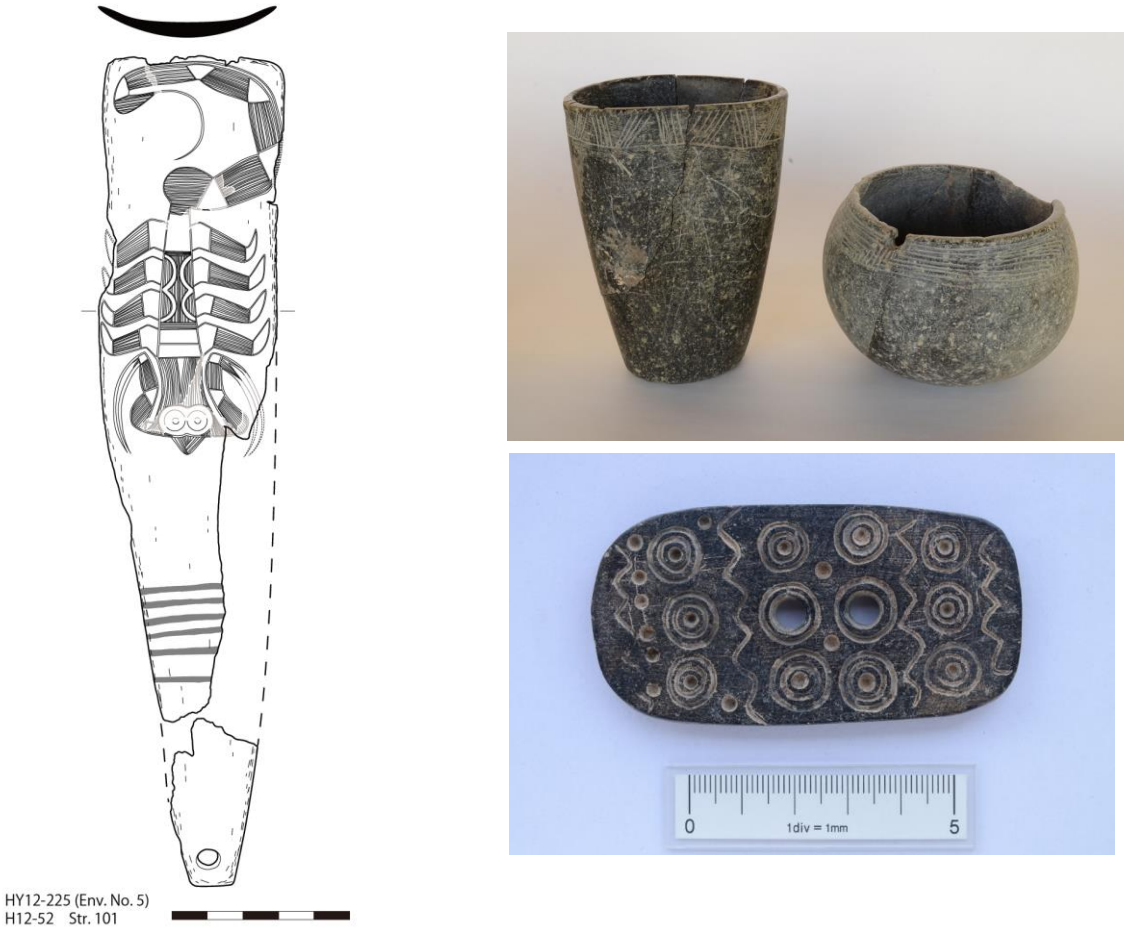

図 13-15　ハッサンケイフ・ホユック遺跡出土骨製品・石製品